



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高等学校の現状報告 : 高大接続システム改革, 北大入試, 大学入試に対して
Author(s)	西嶋, 潤一
Description	北海道大学入試改革フォーラム2017. 2017年5月22日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学アドミッションセンター主催, 北海道大学高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門共催
Issue Date	2017
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86328
Type	conference paper
File Information	4_Nishijima.pdf



現状報告 2

「高等学校の現状報告－高大接続システム改革、北大入試、大学入試に対して」

前 北海道清水高等学校長
西 嶋 潤 一 氏

(司会)

それでは次にまいります。次の報告は「高等学校の現状報告、高大接続システム改革、北大入試、大学入試に対して」と題して、前北海道清水高等学校長の西嶋潤一様よりご報告いただきます。では西嶋様、よろしくお願いいたします。

(西嶋)

西嶋でございます。よろしくお願いいたします。3月の末で北海道教育委員会からの仕事をいただくことがなくなって、無事退職という形になりました。今肩書がありませんので、ここでは前清水高校長となっております。略歴を出したのは、この会場、実は進路関係の先生方も多いと思いますけれども、4分の1くらいの先生方は顔見知りの先生かと思って見っていますが、私が何者かということをきちんと説明しようと思って出しました。

退職すると自由になったという半面、例えばパソコンの環境などが、今までは学校で設定されたものを使っていましたが、自宅に帰ると古いパソコンはXPしか入っておらず、いろいろな不自由があります。まさかWordで打ったものがそのままここに投映されると思わなくて、大変見づらい資料になっています。お手元に3枚、裏表でとじたものがありますので、そちらを見ていただければ分かるようになってはいるかと思います。

略歴のところ、これも本当は、私は世界史の教員なので西暦であればいいのですが、自分の略歴に関してはどうしても何か、今のところはまだ昭和、平成の方が分かりやすいということで、もう少ししたら頭の中もすべて西暦に切り替えようかとは思っています。昭和54年4月から北海道の教員として入りまして、いわゆる進路関係に関



連する仕事をしていた時期を載せてあります。平成25年から上川の校長、その後平成27年から清水の校長ということで拝命を受けて、平成26～28年度まで北海道高等学校長協会の調査研究部に所属して、進路指導委員会委員と。平成27～28年度は委員長として、校長会の進路指導の仕事をしていました。

3つ柱立てをしてあります。1つは高大接続システム改革、もう1つは大学入試、3つ目としてはキャリア教育の在り方等についてお話をしたいと思って、レジュメをまとめてあります。

高大接続システム改革に関しては、先ほど大塚先生の報告に詳しいかと思うので、このあたりはさらっといきます。1つ、特に高校の先生方にきちんと押さえておいていただきたいのは、この接続システム改革、どうしても試験がどう変わるかということが中心になっていますが、実は高校の教育を大きく変革することが求められていることです。知識偏重という言葉があります。決して私は知識偏重ではなくて、基礎知識はきちんと高校で学ぶべきだとは思っていますが、それがすべてになってしまう教育では困るという形になってきて、それでここに出てくる、資質、能力の育

成と、それから主体的、共同的に学ぶというキーワード、さらにアクティブラーニングという言葉です。アクティブラーニングも、何か生徒をただ動かせばいいということだけではなくて、きちんと生徒に考えさせる授業が求められています。それと合わせて、評価の在り方を考え、この後大学の方で必要とする指導要録を改善するなどが求められていく、このような形です。

この高等学校基礎学力テスト、先ほど名前が出てきて、高校生のための学びの基礎診断と、また仮称が変わりつつありますが、実はこれに関しては平成28年度3月末に出てから、ほとんど具体的なものが出てきません。先ほど大塚先生の話でも、平成31年度の導入はどのようなのだろうかという話がありました。北海道の高校では、今年の2月に札幌英藍高校が一応指定を受けて、全国12校の中で選ばれて、CBT版の試験をやって、その中身や何か、ただ、問題は非公表ですので、あまり内容は分かっていませんが、そういうふうにして着々と話は進んでいるような感じですが、具体的なものが出てきません。

北海道高等学校長協会の先ほどの調査研究部の仕事、この報告書はすでに公表されてはいるのだけれども、わりあいと内向きの冊子なので、各学校、高校の校長室に置いてあるだけになっているかもしれません。その調査研究部の報告書の中でアンケート調査を出しているのですが、北海道326校のうち282校が回答しています。高校の校長、または進路指導部に聞いた校長もいるかと思いますが、試行の段階では入試等には用いず、学力向上、指導改善の材料と。平成31年度試行は受けますかといったときに、北海道の高校の場合、全員受験とする学校が27%、希望者についてする学校が25%で、半分かうちの学校が受けると言っています。この試験はおそらく専門学科の高校が中心になるかと思われていたのですが、実はこのアンケートの段階では校種、普通科や、例えば進学校であるなど、そういうところではまったく差がなく、校長先生たちがこういうふうに判断している現状があるということです。

予測がつかないとした学校でも、だいたい平成29年の実施方針、平成30年の実施大綱発表後には、70%以上が方針を決めると言っています。さらに、受験させる時期ですが、これも少し切りが悪くなっていますが、試験内容が基礎の段階ですので、2年の夏休み以降、2年の夏休み前、2年の冬休み前後、合わせると3分の2ぐらいになってしまいます。ですから、2年生の段階で基礎学力をきちんと見て判定し学力向上に生かしていくという形で考えられている、そんなことがこのデータの中からでは出てくるかと思っています。

受験に当たっての課題ですが、これは複数回答で聞いています。一番多かったのが、受験費用が個人負担になる、それから高校の教育活動への影響、さらにテストに向けた学校体制をどう整備するかが課題になっていると答えているデータになっています。試行と同じままでその後もいってほしいというのが46%だけれども、お金を払うのだから入試や就職試験に活用するという意見もあります。ですから、この試行が終わった後、これがまったく見えないですけれども、現状ではこういう形になっています。さらに、ここでは少し言葉が足りなかったのですが、前倒しの負担増とは、これは要は、受験がとにかく高校2年のときにもう始まってしまうのではないかと、こういう負担増は校長たちは嫌っているという現状があります。

大学入学者選抜改革、これについてはすでにいろいろな資料を大塚先生が示していましたので、それほどいらぬかとは思いますが。基本的にはセンター試験の後継で、現段階、平成28年7月、ちょうど1年くらい前の段階で問題として考えられることは、実施時期が早期化、これは1月実施で固まりつつある。ただ、1月より少し早くなる可能性はありますけれども、そんなにないかと。思考力、判断力、表現力の判定機能強化と、この部分がよく分からないというのが一番多かったかと思っています。さらに英語の民間資格等の導入、こういう課題を校長たちが考えていました。先生方の思いも同じようなところにあるかと思っています。

この部分、このレジュメでは、この後原案が出て、6月中と書いたのですが、5月16日に文科省が発表したものがあります。5月17日に大々的に報道されていますけれども、記述については120字以内の国語の要約。国語については問題をご覧になった先生も多いと思いますが、結局複数の資料を使って、要約でいたい終わりそうだということなので、今後どれくらいの配点になるか、それから時間の配分や何かが問題になるかだと思います。

センター試験の場合に、北海道の高校の先生方はよくご存じなのは、例えば国語が80分の中で、北星学園大学は現代文だけ点数化して入試に使用しますから、北星を第1志望でいく生徒は、その80分の中で漢文、古文にまったく手を付けなくて、現代文だけ解いて点数を取るということもやっていたことがあります。ですから、この記述の配点次第では、例えば同じ時間帯の中でやるとしたら、ひょっとすると記述が10点くらいだと、記述の方はやらないという。先ほど大塚先生の中で無解答というのがありましたけれども、そういうことで時間配分することによって、センターの国語はある程度時間をかければ、特に現代文は解けますので、そういうやり方をする受験生が出るかと。ですから、本当は記述を徹底的に見るなら、リスニングのように20分なら20分、切り離して記述の時間帯を設けた方が、きちんと記述の力を見られると考えたりもします。

英語については、先ほどから出ている英検、TOEIC等の問題。これは南風原先生がすぐテレビでおっしゃっていたように、違うものを測定に使うというのはどうかということから、今日の日経の記事になっているかと思います。ただ、あれをもってNHKなどがわっと、聞く、話す方で小学校の教育が始まっているなどというふうにして、英語のことをやりますけれども、高校の教員にとってみると、聞く、話す中心で中学校まで来た子が、実際に大学の個別試験の中では英語が残って、それはTOEICや何かとはまるきり違う試験になります。だから、教育課程の中でやって

いる内容をまた問われるとしたら、ある面では文法が大事だと言っていいのかどうか、僕は専門ではないので分かりませんが、ただ、中学校までほとんど文法事項や何かをそれほど重視しない子供を、高校3年間で個別試験に対応する子供につくり上げるということは、高校にとっては大変に重たい課題になると考えています。

先ほどパブリックコメントの話がありましたが、文科省のホームページを開くと、この件に関してはパブリックコメントを求めています。6月14日締め切りのはずなので、よくこういう場だと先生方の中でいろいろな意見で、これはどうだとセンターの担当者に聞いたりしますが、ぜひ高校の立場としてパブリックコメントを書き込んでいただけると、少しは力になるかと。6月いっぱいでは原案発表ということになっていますから、この6月の頭の段階でいろいろ書き込みをすることは、すごく重要になるのではないかと考えております。

大学教育改革については、アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3つのポリシーの策定と、こういうふうにして進んでいます。また、大学認証評価制度の改定が大きな問題になっています。これについて、プリントの中の2の、高校教育の在り方改革案に対しての現状ということで、高校としての見方をいくつか載せています。

1つは高校教育改革で、教科、科目の見直しにどうしても目が行ってしまいます。合教科、科目型はどの教科が担当するのか。細かいことを言うと、数理探究とずっといっていたのですが、この間あたりから理数探究に変わってきて、そうか、今度は数学ではなくて理科の先生が見ることになるのかと勝手に思っていますが、ここら辺が問題になってくる。それからアクティブラーニングの導入の地域、学校差、アクティブラーニングに対するイメージの違い、評価の問題などが出てくるかと思っています。

大学入学者選抜改革のところでいうと、指導要録の様式変更を調査書に反映させる予定だがということで、これがいわゆる観点別評価などをどん

なふうに記載するかで、限りなく重くなってくる可能性があります。大学入学希望者学力評価テスト、これが、近く原案提示が5月16日になりました。

大学教育改革で、昨年9月に大学と高校の校長で意見交換を持ったのですが、大学から、文科省が3つのポリシーといって、大学は一生懸命策定しているのだが、これは高校にどれくらい浸透しているのかという話もあったことは付け加えておきます。本当にこのことをちゃんと見ている進路の先生はなかなかいないと思って見てはいます。

これで高大接続の話は終わって、次は北大入試と大学入試の現状です。北大入試の合格者の状況、北大発表の資料で前後期の占有率という数字は出ませんので、これは推定して出しています。平成27年度の入試で北大入学者、受かった数字としてはここに1,005という数字があるのですが、このときにすでに入学者が1,000を切ったというのが話題になりました。毎年1ポイントずつくらい下がって、今年は後期が少しよかったのですが、北海道占有率が36.2%という数字になっています。後期の難化によってこういうことが起きていますが、これを北大は今のところは特に問題視していないと聞いています。北海道出身者がいなくなることで心配しているのは、北海道で研究者が育たなくなるということです。

道内高校からの北大合格者数、これは雑誌でいつも各学校を載せますので、本当は高校名を載せてもよかったのですが、あまり露骨なもの何なので全部イニシャルにしました。札幌東や札幌西というふうに順番を並べてあります。ずっと10年くらいの変化を見たら、この札幌の4つはそれほど落ち込んでいないのは分かると思いますが、その後が地方の中心校ですが、ほんとと見ても半減以下の学校が結構あります。ですから、こういう形で地方の中心校で北大に入れなくなってくる。

ずっと僕が進路指導のときも言っていたのは、2番手校が弱いとますます弱くなってしまいます。ですから、旭川や帯広は比較的2番手校でも北大に入れているので、そうすると、旭川、帯広はそれ

ほど大きな落ち込みはなかったかと思うのですが、北大の数が現浪合わせてこんなふうになってしまう。私が進路指導の世界に入った平成の1けたのときは、小樽潮陵あたりが50人くらい北大に入れていたと言って、誰も信じてくれませんが、現実に旭川東で小樽潮陵を目標にしていたこともあります。

ここには載っていませんが、実は札幌市内、今年は開成がよかったですが、開成、旭丘という市立の学校や、札幌市内の高校はそこそこ北大に入れています。ところが、地方の中心校はなかなかもう北大に入れないというか、2番手校あたりだったら、うちは北大は無理くらいに言う場合があります。大学進学率は北海道の場合は41%くらいです。志望率というんですか。全国的には55%ありますから、北海道ではとにかく大学には行かない雰囲気があって、その41%の人間もだいたい70%は道内の大学を志向します。そういう数字が分かっている中で、北大に入れない。

そうなったときに、これは高校から見た大学入試の現状で、道内各大学の前期日程、センター試験の年度別ボーダー得点率の変化です。これはいわゆるB判定、だいたい合格者と不合格者が拮抗するラインです。2ページ目の裏側になります。

センターの平均点が毎年変化しますので、これは5年ごとに見たのですが、62.8%の平均点、67.5%の平均点というふうにして、センターの平均点に対してボーダーが何パーセントくらいかという数字を見ていきました。次にこれを指数にして、少し分かりやすくしようかと思ったので、表が分かれてしまいましたが、平成13年度、センターの平均点が100とすると、北大文系は120取らなくてはいけない。理系も120取らなくてはいけない。これがボーダーだという数字です。

これを比べると、この5年間で、手元で見て、北大の文系だと120~122だったのが、今現在123~126くらいという、そういう見方をします。小樽商大が意外に下がっていなかったのですが、ただ、北見工大や室蘭工大が90ぐらいの指数から今度は80台にいくと。教育大も一番人気のある募集

単位でわずかに下がってきているという感じで見えています。ただ教育大は、昨年度の結果だと、一部はいわゆる全入入試になっています。ですから北海道内の大学がだんだん簡単になってきている現状がこれで分かるかと思います。

道内の高校生は北海道内にいたい、北海道内の大学に行きたい。北大は無理だ。そして次に行くような大学はやさしくなっているとすると、結局勉強するモチベーションがだんだんなくなってしまふというか、勉強しなくていいという発想になってしまいます。私立はもっと簡単ですから、今河合などでもBF（ボーダーフリー）はやめました。でも偏差値35くらいでだいたい入ってしまうわけです。ですから、勉強しなくても大学に行けると、そういう高校生をつくり出したら、これは大学にとっても社会にとっても大変に悲しいことというか、不利益になるかと思います。だから、いかに高校生に勉強させるかというのは、これから考えなくてはいけないことだろうと思っています。

そういうことを少しデータで見ていきたいと思って、次に2次偏差値で出していきました。前期日程、ボーダーラインで必要な2次偏差値の変化を、同じく5年ごと、河合塾からもらった資料で見えていきました。文系は法と文、理系は工と理を中心に見ていくのですが、そうしますと、この15年間で北大はほとんど57.5や60などという数字で変わらない。東北大学は若干、この平成23年から平成28年にかけて1ランク下がっています。これは震災の影響で、関東圏の子供たちが東北を飛び越えていた時期がありますので、これで東北大の文系学部、実は内容的にはすごくお得な内容だと思っているのですが、少し下がっています。だけど東大、京大の文系、また次の理系についてもほとんど変わらない現状がある。これが2次の偏差値です。

偏差値は各会社が決めているデータですので、我々にとって直接意味がないのですが、僕自身が実感として、東大、京大が下がらないのに北大が少し難しくなった、それから教育大や何かはもう

何か異常に簡単になってきているのではないかな。では、それをどういうふうにして示そうかと思ったので、こういう偏差値を使ってみました。北海道内の高校がいろいろ考えるべきことはあるのではないかと考えています。

理想とするのは、北海道内の高校、北大に何だかんだいって1,000人入っているわけで、北海道の今の人口は560万人くらいですから、人口1万人当たり2人くらいの北大生が生まれるというのが人口比だと思います。高齢化率に差がある地域といっても、どんなに小さな町でも、だいたい人口1万人あったら、1人は北大に入れるくらいの子供がいると考えた方がいいのではないかと考えています。そういう子供を育てるとするのは、先生方、ぜひ考えていただければと思っています。

資料で道内高校生保護者の雰囲気を書いています。昔から言っていることで、甲子園に出場するとすごく褒められるのだけれども、東大に合格者を出した学校であまり褒められたという話を聞きません。それから、子供の能力を伸ばすことや努力をさせることよりも、入ればよしという考え方が親の中にはあります。札幌勤務もありますので、札幌では数校を除いては圧倒的に札幌市内の通える大学を優先する雰囲気がある。札幌市内の私立大学に通えるのなら、平気で行ってしまいます。それで理想は、市内の高校を出て、市内の大学に行って、そして札幌市役所に入ること。札幌東高校は札幌市職員の出身高校で見て占有率ナンバーワンと言われています。そういう雰囲気がある。これが一番の幸せだと考える。

これは不思議なんです。だから、例えばスポーツをやっている子が全国大会に行って、企業に勤めてばりばり頑張るということに関しては、先生方や親はあまり違和感なく外へ出します。サラリーマンになるときに、いろいろな特性を持つ子が東京へ行って勤めても全然構わないのではないかなと思うのだけれども、そういう特性を伸ばすことを親もあまり考えないのが、いつも不思議だと思っています。

地方の中心校の生徒は目標に向かって受験す

る。どうせ札幌でも下宿しなくてはならないとなると、外へ出ていく子が増えているのですが、ただ、だんだん経済的に厳しいとなると、外へ出る雰囲気なくなる。

道内は経済状況も厳しく、奨学金に関する状況。奨学金を返せない生徒はすごく今話題になります。では何パーセントなのかといったとき、多くの生徒はきちんと奨学金を返して頑張っているのですけれども、ただ、マイナスの面ばかりが報道されるから、本当に奨学金は借りづらくなっています。もう1つは、高校で手続きをどんどん前倒しでやらせて、入学金は貸してくれる、月10万円でも貸してくれるとなると、もう初めから返せないことを前提にして貸しているのではないかと思うぐらい、奨学金の商売をやっているような感じがあります。そこら辺、親もやはり頑張って、例えば5万円ぐらいの借りに抑えてあげて、少し親が頑張れば、奨学金を返せる生徒は増えるのではないかと思っています。なかなかこうやって外に向かってというのは難しい現状があります。

本来高校3年の最後まで学習を続けて合格できればいいはずが、後期入試まで頑張ろうというのはだんだん通じなくなってきた、そしてAO推薦、早く受かりたいという雰囲気が出てきてしまいます。

新聞記事が、ごめんなさい、スキャナーが間に合わなかったもので、2007年5月14日の道新の記事です。北大より上を目指せとって、駿台予備学校の小林校舎長など、いろいろなところに取材して、もう今は北海道内は東大やいろいろなところへ行くんだと言っていた記事が載ったのですが、現実にはこの記事が載って以降もまるきり外へは出ていません。東大、京大で、今北海道内は合計で100人弱ぐらいが毎年です。本来的にこれも人口比などで考えたら、北海道から東大というのはおそらく150、最低でも100人出せないかとずっとと思っています。そうすると、札幌南高校あたりで40人か50人受け持ってもらえばいいと思ってはいるのですけれども、それぐらい本当は力があるはずです。

この10年余りの変化を私見で言いましたけれども、札幌中心の堅実な志望である。それから、地方の高校の力量が低下してきている。北大に入れない高校が増加している。こういう状態です。医学部希望者は、15年前だと札幌南や札幌北から旭川医大を受ける子はいなかったのですが、このごろは旭川医大を受ける。以前は旭川なんか行ったら札幌に帰ってこられないぞと、これはずっと嘘だと思っていました。僕の教え子などは札幌の大病院にかなりの数がいます。旭川医大とつながっていますので。そういうことがだんだん分かってきてしまって、結局医大の場合には、北大を除いては特に地方枠を持っていますので、旭川医大、札幌医大あたりの道内の占有率が8割ぐらいになっている現状があります。

最後、まとめです。高校のキャリア教育の現状の話をします。大学選びだけではやはり無理だというのは、特に進路指導の後半になって考えだしたことです。将来の設計図をどうやって描かせるか。それからマニュアル化と、とにかく何か先生方の中にはマニュアル化というのを言いたいのだけれども、生徒をじっと見ていると結構可能性が見えたりするので、生徒の可能性を信じて教員が夢や理想を持てるか。先ほど言いましたように、例えば1万人ぐらいの町では1人か2人は北大に入るという発想でいくことがすごく大事かと思っています。

学校設定科目で産業社会と人間というのがあります。将来を考える科目ですが、これをやらせると生徒はすごく勉強するようになります。今、キャリア教育の学びとして、普通科でもこの産業社会と人間を入れている学校が出てきますけれども、将来のことを考えるというのは、生徒にとっては前向きな気持ちを引き出せますので、勉強するモチベーションになります。受験のエネルギーは将来の生き方、働き方を考えること。努力することがどんな意味を持つかを教えることが重要です。

小論文、総合問題、課題解決能力、これは決してむだなことではない。教育大は小論文をやめてしまいましたが、どうして今の時期に小論文をや

めるのか。あれはおそらくはいろいろなところで、先生方の中から、教育大の小論文はとても指導しづらいのでやめてくれという意見が出て、やめていったのです。教育大に言わせると、教科に戻してくれという意見が強かったと言うのですが、小論文を解くことによって、生徒はものすごく考える力がつきます。ましてや今のこの改革の状況の中で、きちんと文章を読んで、文章について述べさせるということはすごく力がつくことのはずです。教育大がやめてしまうと、北海道内はもう小論文を扱わない学校が増えてきてしまうので、そこら辺はすごく心配しております。

もう1つ、進路指導の中で考えるべきこととお話しします。今回の教育改革の中でずっと違和感があるのは、一発勝負でなくて複数回入試だ、何回か受験すると言っていたことです。これも消えましたが、取りあえずセンターの代わりの試験は2回やりたいなどという話がありました。1回では失敗するからといって、失敗したときかわいそうだと言うというのは、結局は、その大学に入らないとその子は幸せにならないという発想の裏返しになっているのではないかということだと思えます。僕自身はやはり、生徒に大学も勧めて、ここはいいよと言っていました、その学校に入らなければだめだという病気にだけはさせないように、それは気を付けていたことなので、結局ここなのです。受験の価値は、本来受験までの努力の過程、一生懸命頑張って受験勉強をやったから今があるのだという、そういう発想の生徒をつくりたいと。ですから、それは後期になろうが浪人しようが、自分が一生懸命頑張った結果の大学で頑張ればいいのだと、ずっとそう思っていました。

加えて大学を知る、知った気になり過ぎないということです。北大 in 旭川を鈴木誠先生と平成13年から始めて、平成13年は700人集まりました。旭川東が400人で、外部から300人集まりました。みんな北大に行くためにというよりも、大学の授業をとにかく見せたかったのです。大学の授業を見せることで、大学についての深みを知ってほしい。実は大学にはもっと知らない世界がある。そ

ういうところに興味を持って飛び込んでほしいと思って始めたものなのですが、何とか定着できるのだけれども、これはやればやるほど何か生徒が分かった気になって、あの大学へ行ってあの勉強をしなければだめだという発想になります。実は高校では分からない大学の中身はあるので、大学に対するわくわく感を持ってほしいと、今でもそういうふうに思っています。大学の持っている内容は幅広く、簡単には分からないという、こういうことを考えたい。

さらに生徒の将来を見据えたい。保護者に対しては、生徒の将来を見て、言いたいことはきちんとするべきだと。保護者に押されまくりです。今の保護者は、先生、余分なことを言わないでください、とにかく北海道から出たくない、と平気で言うお母さんはたくさんいます。どんなにできる子でも北海道内にいることがありますけれども、保護者には、これからの将来のことを考えたら、とにかくそういうことは伝えたいです。

僕は10年後、20年後と書いたのだけれども、極端に言うと、生徒が社会人をやって、もう本当にほっとしたとき、定年退職のときでもいいのですが、ああ、あの学校を出てよかったな、と思われたい高校でありたいと思っています。溝上先生という京都大学の先生が河合塾と一緒に「10年トランジション」という研究をしていて、札幌市内やいくつかの高校にお願いしながら、10年後の満足度を調べています。今まだ途中なのですが、ああいう研究が実を結んで、高校というのは振り返っていい学校であることが理想と、ずっとそういうふうに思っていました。

12年前、「東高教育の学力向上策と理念」として旭川東で作った資料で、新入生の保護者に必ずこういう話をして、毎年少しずつ改訂しているのですが、12年前が最後の改訂になりました。その後は今は、今日来ている松井先生がどういうふうに話しているか分かりませんが、基本はこうだと思っています。受験は大学に入るためというより、受験をきちんとやらなかったら、なかなか基礎学力というか基礎的な能力ができない。基礎学力を

きちんとつけて、そして社会人として頑張っていること、こんなことをずっと考えていました。予定は30分と言われて、5分オーバーして、大変申し訳ありませんでした。どうもありがとうございます。(拍手)

(司会)

西嶋様、どうもありがとうございました。なお、ただ今の報告内容に関するご質問については、受付の際にお渡しした質問票にご記入ください。この後の休憩時間に係の者が回収に伺います。

それではここで15分ほど休憩時間を取らせていただきます。なお、ただ今から係の者が質問票回収のために巡回いたしますので、これまでの基調講演および現状報告に関するご質問等がございましたら、質問票にご記入の上、係の者へお渡しください。

資 料

【略 歴】

昭和32年3月生 十勝管内音更町出身
昭和54年3月 金沢大学法文学部史学科卒 同年4月 北海道の教員に採用
平成2～17年度 旭川東高校教諭（10～17年度 進路指導部長）
平成20～22年度 札幌東高校教頭
平成23～24年度 帯広三条高校教頭
平成26～28年度 北海道高等学校長協会調査研究部
進路指導委員会委員（27、28年度は委員長）

I 高大接続システム改革

1 最終報告（平成28年3月31日発表）に関して

(1) 高校教育改革

- ① これからの時代に求められる資質・能力を育成するという観点に立った教育課程の見直し
・教科・科目等の見直し、社会に開かれた教育課程、共通性の確保と多様化への対応
- ② 主体的・協働的に学ぶ学習の観点からの学習・指導方法の抜本的充実、改善
・アクティブ・ラーニングの視点からの「学習・指導方法の改善」、「教員の指導力向上」
・評価の在り方の見直し、指導要録の改善など「多面的な評価の推進」、妥当性・信頼性向上
・「指導・活用・探究」の学習プロセス、対話的な学び、見通しと振り返り
- ③ 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入
・高等学校教育の多様性に対応、基礎学力の確実な定着と学習意欲の喚起を図る
・高等学校の質の確保・向上のためのPDCAサイクルを構築

※北海道高等学校長協会調査研究部進路指導委員会アンケート結果（平成28年7月実施）

北海道内326校のうち282校が回答（平成29年1月発行の調査研究報告書に記載）

設問3 試行では入試等には用いず学力向上・指導改善の材料、31年度試行受検の可能性

全員受検 27% 希望者受検 25% 受検せず 17% 予測つかず 31%

設問4 予測がつかないとした高校、対応がはっきりする目途

H29実施方針公表後 41% H30実施大綱発表後 36% H31試行前 6%

H31試行後 7% 試行状況を見て 10%

設問5 受検させる時期

3年夏休み以降 18% 3年夏休み前 15% 2年冬休み以降 36%

2年夏休み以降 19% 2年夏休み前 12%

設問6 受検にあたって課題と考えられること（複数回答可）

受検費用が個人負担	223校	高校の教育活動への影響を懸念	184校
テストに向けた学校体制の整備	143校	コンピュータ使用の可能性	128校
同一問題、同一日実施でない	107校	必修科目増単の必要性	62校
学校が会場となる可能性	55校	校長会の検定等の利用の仕方	49校
短文記述問題導入の可能性	47校	結果が段階別で示される	34校

その他では、道教委実施の学力調査との関係、何の目的なのか、等の意見があった
 設問7 平成35年度以降の活用方法（科目選択受検、理科、地歴・公民も加わる予定）
 試行と同じ 46% 入試・就職試験に活用 16% その他 5% わからない 33%
 試行と同じとする理由では、学力定着と指導改善が評価、前倒しでの負担増は嫌われた
 入試・就職試験に活用の理由は、推薦・AO、就職生徒の学力保証、有料なので有効に

(2) 大学入学者選抜改革

- ① 高校、大学双方の改革の実効性を高める上で重要、学力の3要素を多面的・総合的に評価
- ② 大学は、多様な入学希望者が培った力をどう評価するかを入学者受入方針で明らかにし、大学のポリシーを具体化する入学者選抜方法を実現
- ③ 各大学の個別選抜でも多様性が尊重されるべき
- ④ 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の創設
 ・「知識・技能」を基盤とした「思考力・判断力・表現力」を中心に評価

※北海道高等学校長協会調査研究部進路指導委員会アンケート結果（平成28年7月実施）

設問9 基本的にはセンター試験後継、現段階で問題として考えられること（複数回答可）

実施時期の早期化	202校	思考力・判断力・表現力判定機能強化	193校
英語での民間資格等の導入	109校	国・数での記述式導入	95校
段階別評価の導入	75校	正解が一つと限らないマークシート方式	69校

その他ではマークと記述の日程がどうなるか、CBT環境が整備できるのか、の意見

(3) 大学教育改革

- ① 入学以前に培った学力3要素を基に、主体性を引き出す多様な能動的学修の場を創る
- ② アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3つのポリシーの一体的な策定
- ③ 大学認証評価制度の改定（平成30年度からの次期認証評価期間に向け）

2 高校教育の在り方、改革案に対しての現状

(1) 高校教育改革

- ・教科、科目の見直しには目がいく、合教科、科目型はどの教科が担当？
- ・アクティブ・ラーニング（AL）導入の地域・学校差、教員研修の状況
- ・特にALでの評価の在り方、観点別評価の導入状況、指導要録の様式変更
- ・共通性の確保と多様化への対応、対話的な学び・・・多忙を克服できるのか
- ・高等学校基礎学力テスト、試行期間の学力向上・指導改善の材料が本実施で続くのか
- ・平成29年2月、全国12高校でプレテスト実施、4月返却（CBTで実施）

(2) 大学入学者選抜改革

- ・指導要録の様式変更を調査書に反映させる予定だが
- ・個別入試改革の在り方、大学による考え方の違い
- ・大学入学希望者学力評価テスト、4月14日新聞報道、近く原案提示、6月実施方針公表
- ・新聞報道、国語の記述が80～120字で数問（採点を民間委託）、英語は民間試験2回まで

(3) 大学教育改革

- ・3つのポリシーは高校や受験生・保護者にどれだけ届いているのか（昨年9月、大学との意見交換の場で、大学から）

Ⅱ 北大入試、大学入試

1 北大入試、合格者の状況

(1) 道内出身者占有率（北大発表資料、前後期合計の占有率は発表がないので、手元で計算）

平成○年度	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
前期合格数	1086	1048	1102	1179	1090	1059	1024	952	905	895	863	841	826
占有率	51.4	49.9	52.4	56.1	53.9	52.1	49.4	45.9	43.5	43.0	41.3	40.5	39.9
後期合格数	214	219	191	208	162	179	189	151	144	127	127	106	124
占有率	42.0	42.7	37.4	40.7	30.9	32.9	33.8	28.2	26.6	23.7	23.7	19.3	22.4
前後期合計	1300	1267	1293	1387	1252	1238	1213	1103	1049	1022	1005	947	950
占有率	49.6	48.5	49.4	53.1	49.2	48.0	46.1	42.3	40.0	39.0	38.0	36.0	36.2

19年度京大、20年度東北大が後期廃止、旧帝大で後期が残るのは北大、阪大、九大
23年度から前期で総合入試を導入、24年度以降は震災が入試動向に影響

- ・平成27年4月の北大入学者、道内から千人をきったことが話題
- ・今春、前期で40%をきり、後期は難化が進む
- ・地方推薦枠を設けた医大とは違い、北大は特に問題視してはいない、と聞いているが

(2) 道内の高校からの北大合格者数（雑誌等の調査により 現浪込み）

高校名	SH	SN	SM	SK	AH	IH	OtC	MS	ObH	KuK	KiH	HC
平成12年度	80	90	129	123	65	31	37	16	30	16	15	21
平成13年度	67	83	136	153	79	31	31	12	27	21	23	16
平成14年度	70	88	122	104	61	38	27	20	36	21	15	19
平成17年度	121	112	112	150	64	31	34	23	46	28	19	21
平成18年度	112	117	115	156	56	27	36	27	43	19	28	19
平成19年度	90	120	151	129	51	32	35	22	40	24	30	18
平成22年度	102	106	128	129	56	25	30	19	46	15	19	23
平成23年度	110	99	131	150	53	26	32	20	35	14	22	15
平成24年度	86	107	116	127	44	23	30	25	33	10	16	23
平成27年度	102	76	116	129	43	14	21	28	39	14	18	20
平成28年度	65	85	124	105	49	17	23	10	32	18	12	17
平成29年度	66	83	112	127	44	22	16	11	27	15	15	9

- ・札幌はともかく、地方の中心校でも北大の数は減少
- ・地方の2番手校でも北大に入れない、道内で北大に卒業生が入る公立高校は確実に減少か
- ・大学進学率が低いのに地元進学率が高い北海道、さて、どこの大学に行くのでしょうか

2 高校から見た大学入試の現状

(1) 大学入試レベルの変化

① 道内各大学前期日程、センター試験の年度別ボーダー得点率の変化（河合塾資料より）

	センター 平均点	北大文系	北大理系	樽商大	帯畜大 (除獣医)	北見工	室蘭工	教育大 札幌	教育大 旭川
平成13年度	62.8	75.4 ～76.9	理・工 75.3 ～80.0	64.4 ～66.9	68.8 ～71.2	58.1 ～61.3	59.1 ～67.3	学校教育 68.1 ～72.0	学校教育 63.1
平成18年度	67.5 文 65.4 理 68.0	78.9 ～80.7	理・工 78.7 ～82.0	70.0	60.0	54.0 ～60.0	56.5 ～61.3	全て 67.8 ～75.0	技芸除く 65.0 ～70.0
平成23年度	63.3 文 62.4 理 63.1	76～79	総合理系 75～77	69	62	52～55	53～55	全て 63～67	技芸除く 61～64
平成28年度	62.5 文 60.9 理 62.4	75～77	総合理系 76～80	66	64	52～53	52～54	技芸除く 64～67	技芸除く 59～64

センター平均点は、800点満点での％、18年度以降は900点満点の文・理別も掲載

①-2 (補表) 上の表についてセンター平均点を100とした指数で表すと

	センター 平均点	北大文系	北大理系	樽商大	帯畜大 (除獣医)	北見工	室蘭工	教育大 札幌	教育大 旭川
平成13年度	100	120～122	120～127	103～107	110～113	93～98	94～107	108～115	100
平成18年度	100	121～123	116～121	107	88	79～88	83～90	104～115	99～107
平成23年度	100	122～127	119～122	111	98	82～87	84～87	101～107	98～103
平成28年度	100	123～126	122～128	108	103	83～85	83～87	105～110	97～105

18年度以降、北大文系、樽商、教育大は文系平均、北大理系、帯畜、北見、室蘭は理系平均を基に指数化

- ・北大が少しずつ難しくなり、他の国公立が少しずつ簡単に
- ・医学部の理科3科目入試は無くなり、教育大も小論文から教科入試へ、生徒の負担減
- ・北大は無理、他は少しずつ易化の状況は、北海道の高校生の学習習慣、意欲に確実に影響

② 前期日程、ボーダーラインで必要な二次偏差値の変化(河合塾資料より)

【文系学部】

	北大法	北大文	東北大法	東北大文	東大文一	東大文三	京大法	京大文
平成13年度	57.5	60.0	62.5	60.0	70.0	67.5	67.5	67.5
平成18年度	60.0	60.0	62.5	60.0	70.0	67.5	67.5	67.5
平成23年度	57.5	57.5	62.5	60.0	70.0	70.0	67.5	67.5
平成28年度	57.5	60.0	60.0	57.5	70.0	67.5	67.5	67.5

【理系学部】

	北大工	北大理	東北大工	東北大理	東大理一	東大理二	京大工	京大理
平成13年度	55.0	55.0～57.5	57.5	57.5～60.0	67.5	67.5	65.0～67.5	67.5
平成18年度	52.5～55.0	52.5～57.5	55.0～57.5	57.5～60.0	67.5	67.5	62.5～65.0	65.0
平成23年度	総合理系	55.0～57.5	57.5	57.5～60.0	67.5	67.5	62.5～65.0	65.0
平成28年度	総合理系	57.5～60.0	57.5～60.0	57.5～60.0	67.5	67.5	65.0	65.0

- ・平成23年度から28年度の5年間で、東北大学の文系で難易度に変化
- ・少子化と言われる中でも難関大学では、この15年間でも難易度に大きな変化はない

(2) 道内高校生(・保護者)の雰囲気

- ・甲子園に出場すると誉められ、東大に合格者を出しても・・・
- ・子どもの能力を伸ばすことや努力させることより、「入れば良し」の考え方
- ・札幌では数校を除き、圧倒的に、札幌市内の通える大学を優先する雰囲気
(理想は、市内高校 → 市内大学 → 札幌市役所)
- ・地方の中心校の生徒は目標に向かって受験する雰囲気は残る、それ以外の高校は基本道内で全体に東京等に出て行く雰囲気が無くなっている
- ・道内は経済状況も厳しく、奨学金に関する現状が、生徒のやる気を奪う面
- ・本来、高校3年の最後まで学習を続けて合格できればいいはずが、とにかく早く進路決定を望む保護者

や生徒が多くなり、AO・推薦に飛びつく

- ・ 2007（平成19）年5月14日の道新記事「北大より『上』を目指せ」、志望は増えず
- ・ 各高校は「東大ツアー」等、大学を見せる取り組みは継続し早めに志望させることをねらう

(3) この10年余りでの変化（私見ですが）

- ・ 札幌中心の堅実な志望、一番の要因は学費
- ・ 地方の高校の力量低下、北大に入れない高校の増加、教員の意識にも問題が
- ・ 進学校における医学部希望者の増加、前は少なかった札幌から旭川医大の流れも
- ・ 大学で学ぶのは、教養を身につけるより資格取得のため、この傾向が特に顕著に、北海道では進学者の中にしめる専門学校の比率が他の都道府県よりも高い

Ⅲ まとめとして

1 高校のキャリア教育の現状

(1) 進路指導からキャリア教育へ

- ・ 大学選びから将来の設計図を描かせる指導への変化
- ・ マニュアル化の問題点
- ・ 生徒の可能性を信じ教員が夢や理想を持てるか
- ・ 総合学科における学校設定科目「産業社会と人間」、キャリア教育の学びとして普通科でも

(2) 受験へのエネルギーとしての役割

- ・ 将来の生き方、働き方を考えることが受験勉強のモチベーション
- ・ 努力することがどんな意味を持つかを教える
- ・ 小論文、総合問題、課題解決能力、けっして無駄なことではない

2 進路指導で考えるべきこと

(1) 教育改革の中での違和感

- ・ 一発勝負でなく複数回入試、何回か受験することで「いい」大学へ
- ・ 受験の価値は本来、受験までの努力の過程、努力の結果を認める進路指導であるべき

(2) 大学を知る、知った気になり過ぎない

- ・ 「北大 in あさひかわ」平成13年から、14年、16年、その後、隔年実施（奇数年は函館、帯広等で実施）
- ・ 放課後のミニ講義等、大学の専門性の活用
- ・ 大学の持っている内容は幅広く、簡単にはわからない、意識の必要

(3) 生徒の将来を見据える

- ・ 保護者に伝えるべきことを考える
- ・ 10年後、20年後に評価される高校でありたい

【参考】 12年前、「東高教育の学力向上策と理念」として、新入生の保護者に話した内容

- ① 受験生活は青春の重要な一部である
- ② 「人格の向上」と「学力の向上」とは強い関係がある
- ③ 「社会への関心」や「広い視野」を持つようにしなければ、有力大学への合格は難しい
- ④ 「悩みや苦しみ」は誰もが持っているもの・・・耐えて努力を続けてこそ成長がある
- ⑤ 「安易な合理主義者」より「不器用な努力家」の方が合格率も高いし、「人間的な魅力」も大きい
- ⑥ 「頭が良い人」とは、受験においては「計画的」で「継続的努力」ができる人
- ⑦ 学力の形成は暗記だけではだめ・・・「理解」と「演習」を重視すること
- ⑧ この学校にいて、この学校の生徒であることに「誇りと自信」を持とう